

わたしゃお多福 御室の桜 はな(鼻・花)が低ても 人が好く

上記は、^{おむろにんなじ}御室仁和寺に咲く、有名な通称「お多福桜」を詠んだものです。ここの地質は岩盤で、土の層が非常に薄いので、養分が十分蓄えられずに根も広がらない。そのため、幹が高く伸びて枝が張るのではなく、地表近くから枝が分かれていき、桜の花も地上低いところに付くのです。お多福さんとの関連は説明を要しないと思うので省きますが、京都市中の桜が散り終わる頃に、最後の楽しみとなる遅咲き桜です。五重塔を背景にした風情は、それは見事なものです。

「御室」とは「高貴な方が住まわれる僧坊」という意味ですが、仁和寺についての高貴な方とは、出家落飾して日本史上初めての法皇となり、仁和寺を本宮とされた宇多天皇のことを指します。また、このことにちなんで、御室の尊称が地域一帯の地名ともなったわけです。



第59代。在位は仁和3年(887)～寛平9年(897)。光孝天皇の第七皇子。

宇多天皇の治世は平安朝が始まって約100年経た頃です。唐を模倣した「律令制」も機能不全に陥り、役人の怠惰腐敗と税収の不足が甚だしい状況でした。朝廷としても行政と財政の両面で、今日風に言えば構造改革が必要になったわけです。この時、改革の推進者として抜擢されたのが、かの菅原道真であり、政治を私物化する藤原氏の専横を抑えるための策でした。

道真の家系はそもそも天皇に学問を講義する学者の家として有名で、彼自身も漢文学、中でも「紀伝道」(今の文学部史学科・文学科に相当)の秀才でした。しかし政治の舞台は門外漢であり、家格も低い。そんな道真の登用は青天の霹靂^{へきれき}、まさに“サプライズ人事”といえますね。

ところで、宇多天皇には何かと特筆すべき点も多く、主なものは下記の通りです。

- ①一旦は臣籍降下(皇族の籍を離れ臣下となる)した身分から天皇になった初めての例。
……源定省^{さだみ}と名乗り、淑子^{よしこ}(藤原基経の異腹の妹)に預けられ、養子となる。
- ②関白の始まり(仁和3年・887、藤原基経) ……但し、基経没後は摂政も関白も置かず。
- ③桓武平氏の始まり(寛平元年・889、桓武天皇の曾孫・高望王^{たかもちおう}らに平姓を与える)
- ④遣唐使の中止(寛平6年・894) ……菅原道真の建議を採用。
- ⑤天皇が出家(昌泰2年・899)して法皇となったことも初例。
- ⑥歌会を盛んにし、後の『古今和歌集』撰集(醍醐天皇、延喜5年・905)の契機となった。

即位の時点からして特異な宇多天皇でしたが、上記も含めて治世の大部分は守旧派・藤原氏との攻防や妥協の産物であったと思います。しかし、基経の死去(891年)以降は様相が一変しまして、道真の登用のほか、摂政・関白が以降40年間も設置されないという天皇主導の時代でした。

光孝天皇は「君がため春の野にいでて若菜摘むわが衣手に雪は降りつつ」の歌でも有名ですが、摂政・基経の思惑で、陽成天皇^{ようせい}廃位後のワンポイント・リリーフのような形で即位した方です。そうした立場を自覚されたのでしょう、王統を子孫には継承する意思の無いことを示すために、皇子・皇女全員を臣籍降下させたというわけです。定省(=宇多天皇、17歳)などは第七皇子でもありますから、皇位などは全く無縁の存在であったわけです。しかし、その定省を擁立したのも他ならぬ基経でありまして、そこには彼なりの大きな計略が巡らされていました。

基経と二人の妹

基経には同母妹である高^{たかいこ}子と異腹の淑子がおります。基経と高子の父は藤原長良でしたが、その弟の良房(第56代清和天皇の時、臣下で初の摂政となる……藤原摂関政治の開始)の政略で、二人は良房の養子となりました。そして高子は清和天皇に入内して、後の陽成天皇を産みます。一方の基経は良房没後に摂政を継承します。良房は、藤原四家(南・北・式・京)のうちの北家の嫡流ですが、こうして江戸幕末まで続く、藤原北家による摂関独占体制がスタートしたわけです。

余談ながら、藤原氏以外で摂関となった者は僅かに2名だけしかおりません。あの豊臣秀吉とその養子・秀次ですが、これは特殊な事情によるものですから、実質上は藤原氏の独占状態です。

もう一人の妹淑子は後宮の女性を束ねる尚^{ないしのかみ}侍、いわば秘書長官のような立場にいました。職掌上、また基経の妹として、隠然たる存在であるわけですが、仏教および僧の益^{やくしん}信に対して深く帰依していましたので、そのことが養子の定省にも強く影響を及ぼすわけです。

淑子と益信

『宇多天皇御記』と呼ばれる天皇の日記中に、「朕兒童たりしより生鮮を食はず、三宝に帰依す。八、九歳のあいだ台嶺に登り修行を事とせんと思へり。」と記されております。この台嶺とは、比叡山延暦寺のことを指します。これを見ますと、宇多天皇が幼少の頃より仏教に深く帰依され、仏門を志されたように思えます。皇位から遠い皇子には、こうした例が多いことも確かです。

淑子の存在は想像以上に大きいと思います。宇多天皇の母・班子とも親しく交わっていますし、定省とは仏教への帰依により心通うものがあり、信頼も置いています。従って、擁立に関しても強い支持者となりますし、さらに「兄とはいえ、基経の思うがままにはさせない」という気持ちを抱いたとしても、何ら不思議ではありません。藤原氏とて決して一枚岩ではないわけです。

この淑子が大病を患った時、祈祷をもって治癒させたのが益信です。淑子は夫の死後に邸宅を寺に変え、益信を開基にしたほどです。また、宇多天皇の出家時に戒を授けた人物も益信です。彼は東寺や東大寺などの要職も務めました。その弟子は多く、法脈は揺るぎ無いものとなり、仁和寺を中心とする真言宗広沢流の祖と呼ばれています。

宇多天皇も、この二人に対しては特別に厚遇しており、淑子は破格の従一位に叙されています。尚侍ですと通常では従三位止まり、従一位となると太政大臣や摂政・関白に相当するものです。因みに、右大臣に上り詰めた道真ですら従二位止まりです。(但し、死後に正二位を追贈される。)そしてもう一人の益信の方は権律師に、さらには10年間も空位だった大僧正に任じられました。こちらも最終的には従二位相当です。

清涼殿殺人事件

さて、上記で明らかなように、清和天皇・高子・陽成天皇・基経の陣営は圧倒的な権力基盤を誇ります。それがどうして陽成から光孝に譲位され、また宇多天皇へと繋がったのでしょうか。

実は、病弱で神経質なところがあり、乱行ぶりが目立った陽成でしたが、元慶7年(883)11月、何と宮中清涼殿にて乳兄弟・源益^{かくさつ}を格殺する(なぐり殺す)という大事件を引き起こしたのです。それ以前から資質について疑問視されていたわけでもあり、陽成の廃位は決定的となりました。この時は、さすがの基経もかばい切れず、やむなく路線修正を余儀なくされた次第です。

皇位継承の舞台裏

高子は入内する前に在原業平と恋仲でしたが、基経は清和に娶わせるために仲を引き裂いたといわれます。その恨みゆえか、基経の娘を陽成には入内させまいと高子は断固拒んだようです。基経としては高子との折合いも悪く、また陽成の皇子の中から擁立することも憚られたようで、やむなく王統の血筋を遡ることになります。紆余曲折の末に、第54代^{にんみょう}仁明天皇の第三皇子に白羽の矢が立ち、光孝天皇として即位するわけです。この時、光孝は既に54歳と高齢でした。

このような経緯で宇多天皇への道が開かれたという次第ですが、基経のシナリオからすれば、年齢も若い定省に娘・^{よしこ}温子を嫁がせることができ、さらに御しやすいと考えたようです。

『寛平の治』

摂関や藤原氏を抑え、宇多天皇中心に政務が進んだ時代を称えて「^{かんびょう}寛平の治」と呼びます。但し、即位直後には有名な^{あへん}阿衡事件が起きました。基経は、関白を「阿衡」になぞらえた任命書の文言に難癖を付け、政務をボイコットしたわけです。基経を諫める者は誰もおりませんでした。事態收拾のため起草者・^{ひろみ}橘広相は辞職、天皇が釈明を帯びた形で再度依頼し、基経は初の^{かんぱく}関白になるわけです。この時同時に、基経の娘・温子が宇多天皇に入内を果たしています。基経の狙いは新帝の出鼻をくじいて、藤原氏以外の側近者を失脚させ、娘を嫁がせて権力基盤を固めることにあったようですが、宇多天皇にすれば即位早々の屈辱の一件でした。

その基経が没すると天皇は改革に踏み出します。失脚した広相の学問の師が菅原是善であり、その息子の道真を^{くろうどのかみ}蔵人頭という側近に抜擢したのです。基経への意趣返しと言えそうです。基経の子・時平は21歳と若く、公卿に列したばかりで、天皇も主導力を発揮できたわけです。

この時の改革の骨子は、**都の貴族は勝手に地方へ居住・寄留してはならない**、というものです。これがどうして改革になるのかと言え、下記のような怠惰腐敗を防止し、一掃するためです。

国司……地方に派遣される役人。中央ではポストに就けない中級以下の貴族が多い。徴税権や警察権を持つ。朝廷に収めるべき税(米など)の一部を横領する。任期が切れても都に戻らず土着する(土豪化し、後の武士となる)。新任の国司を妨げ、追い返す例もある。上級貴族……地方には赴任せず、土豪に管理を任せ、自らの私有地拡大のため開墾を進める。朝廷が農民に与えた口分田も吸収し、「**荘園**」が拡大する。荘園には課税や査察が及ばないので、貴族の私腹は肥えても朝廷の税収は減る一方となる。

この「地方政治の乱れ」にメスを入れたわけですから、守旧派の反発は必至です。後年に生じた^{へいしょうもん}平将門や^{ふじわらじゆんゆう}藤原純友の叛乱は、これら土豪による決起の典型でしたし、道真失脚の要因は既に醸成されていたわけです。その転機ですが、宇多天皇の譲位という形で早くも訪れました。

宇多天皇は譲位に際し、教訓をしたためた『^{かんびょうのぎゆいかい}寛平御遺誡』を新帝(醍醐天皇)に授けました。そこには道真と同時に時平も重用するように説かれています。事実、道真が右大臣に上った時、時平も左大臣に就いていますから、もはやバランスを取らざるを得ない状況であったようです。宇多天皇の後ろ盾を失い、孤立無援となった道真は、その2年後に大宰府左遷となっています。大宰府に赴く時、道真は法皇宛に次の歌を残しています。最後の懇請と言えましょうか。

流れ行く われは水屑となりはてぬ ^{しがらみ}きみ 柵 となりて とどめよ

大宰府で没するまでの2年間、道真は多くの歌を詠みましたが、宇多法皇を慕うようなものは一首もありません。やはり、上記の歌で思いは尽きていたと言えます。宇多天皇は確かに改革に臨みますが、より重要なことは皇統の継承です。この点で、道真との温度差が生れる結果となり、厳しい現実の掟なのでしょう。御室の桜は、それらをすべて知っているわけですね。